

「九州中国学会報」第二十六卷抜刷
昭和六十二年五月

『三俠五義』に見る包公説話の新展開――

――清代における俠義公案小説の発生――

根
ヶ
山

徹

『三俠五義』に見る包公説話の新展開

——清代における俠義公案小説の発生——

根ヶ山 徹

光緒五年（一八七九）に上梓された『三俠五義』は、石玉崑によって巷間に行われていた説書に淵源する。石玉崑が説書家として活躍していた時期について、李家瑞氏は『非廠筆記』の記載に基づき、咸豊・同治年間（一八五一〜一八七四）と推定したが、阿英氏は「嘆石玉崑」詩を収める金梯雲抄本『子弟書』が、道光三年（一八四三）から二五年（一八四五）の間のものであることから、道光年間（一八二一〜一八五〇）にまで溯ることが可能であるとした。石玉崑による説書は、「唱本」として残されたほか、『龍図耳録』と呼ばれる筆録本としても伝抄され、『三俠五義』は、直接にはこの『龍図耳録』に問竹主人、入迷道人の手で修改が施されて完成したものであると考えられている。更に光緒五年（一八八九）には、兪樾によって校訂が加えられ、書名を『七俠五義』と改められる。兪樾は該書について、「このような文章であれば、平話小説としてみとめることができ、これくらいの平話小説であれば、世の中の（他のジャンルの文学と伍しうる）新しい文章としてみとめることができる。」という賛辞を呈し、江蘇、浙江での流行に寄与したことは周知のごとくである。

魯迅は該書が完成するまでの過程を次のごとく述べる。

民間に伝わる包拯の話では、彼の事跡はおおむね怪異なものであり、元人の雜劇にはすでに包公の「断立太后」^①「審烏盆鬼」といった異説があった。明人はまた《龍図公案》、別名を《包公案》と呼ぶ短書十巻を作り、包拯が私訪、夢兆、鬼語などを借りて、六十三件の難事件を裁く話が収められている。しかし、文章も内容もはなはだ拙劣で、かろうじて文字を識っている者が作ったものと思われる。その後、敷衍されて大部のものになったが、やはり《龍図公案》と称した。こちらは構成が緻密になり、首尾一貫しており、すなわち《三俠五義》の藍本になったものである。^②

つまり、元代に胚胎した包拯に纏わる説話は、明代に至って小説に敷衍され『龍図公案』が作られた、のちに更なる増訂が加えられ、それが『三俠五義』の藍本となった、と言っているのである。

また、内容については、

錯綜した事柄を組み立てる技量に至っては、かなり稚拙ではあるが、草野の豪傑を描写するときだけは、生き生きとして生彩を帯びたものになっている。ときおり世情を織り込み、諧謔をまじえているのも、また荒くれ男の描写に格別の光彩を放たせている。折しも世間では、妖怪変化の話や、色恋沙汰の物語にうんざりしていたところであったので、この作品は举止豪快で洒脱な豪傑たちの描写が特長となり、数ある小説のなかで頭角をあらわすことになったのである。^③

と言って、物語の構成には稚拙が見られるものの、豪傑たちの描写は生彩を帯びると高く評価している。

また孫楷第氏は『中国通俗小説書目』において、小説部乙（長篇）説公案のなかの「俠義」の子目のもとに、『三俠五義』を『小五義』『続小五義』といった続書や、『施案奇聞』『彭公案』などの同時代の小説と一括して著録している。因みに孫氏は書目冒頭の分類説明で、小説子目の「公案」について次のような説明を加えている。

曰く公案、注に「皆な是れ朴刀桿棒発跡変泰の事」といっているのは、俗世に逃れた遊侠の士が招安を受け奉職することであり、つまり俠義武勇のたぐいである。

たしかに「俠義武勇之属」という概括的な見地よりすれば、これらを総括して分類することは穩当かもしれない。しかしながら、魯迅によってその生成の過程を略述されるように、『三俠五義』は明代に興隆した包公説話を取り込み、これを敷衍して長篇の俠義公案小説として完成されたものであり、それぞれの小説の成立事情を考慮に入れるならば、これらを一律に論じ去ることは必ずしも妥当とは言えない。

二

そこでさきに掲げた魯迅の所説を補足する意味で、『三俠五義』が成立するに至るまでの包公説話の発展の過程を概観しておくことにしたい。

包拯が仮構文学に姿を現わす最初は、宋代の話本においてである。現存するものは、『清平山堂話本』に収められる「合同文字記」と『醉翁談録』の千集卷一「負心類」に収められる「紅綃密約張生負李氏娘」のみである。しかしここでは、包拯は単に物語中の一登場人物でしかなく、岩城秀夫氏が宋代における裁判に関する講釈は、「語り手、乃至聴衆の関心は、裁判官が誰であるかよりは、むしろ事件の推移なり顛末になり多くかけられ、特定の裁判官との結びつきに於いて、話の興味が増すようなかたちのものでなかった」と推定されるごとく、ことさらに包公説話と呼ぶに値しない。⁹⁾

元代になると、雜劇の中に包公戯と呼ばれる裁判劇の一ジャンルが形成されて、包拯は裁判官としてストーリーの

展開に重要な役割を担うようになる。元代におけるこうした包公戯の盛行については、岩城氏が、「民衆が、権勢に屈せぬ剛直な裁判官の出現を期待し、舞台の上に理想的な人物を造型していったのであろう。演技がもたらす解放感、観衆のもつ特権である。観客は鬱屈した気持を、演劇を通して発散させようとした。それには庶民的な体臭の濃厚な、しかも貴権をおそれず公正な裁判を行なったと伝えられる包拯こそ、もっともふさわしかったのではなからうか。」と論じられるごとくであろう。^⑩

明代では、包拯の登場する文学作品は、戯曲小説いずれの分野にも見ることができるようになる。小説に関しては、包拯の物語中に占める位置よりして、およそ二つの系統に分けることができる。

その一つは、元の包公戯と同じく、包拯を裁判官に擬定する、いわゆる公案小説の類で、まさに包公説話と呼ぶことのできるものである。因みに、明代において包拯の登場する戯曲は、すべてこの系譜に属する。

さて、明代における公案小説の濫觴は講唱文芸である。成化年間（一四六五～一四八七）に伝来の説書をテキストの形で出版した「成化説唱詞話」には、現存する限りで八種の包公説話が収められている。この「成化説唱詞話」所収の包公説話に特徴的な事柄は、元の包公戯において幽明両界に通ずる特異な能力を持つ人物として描かれていた包拯の形象がそのまま受け継がれていることに加えて、新たに仁宗を輔佐するために天上から派遣された文曲星の転生であると規定されていることにある。^⑪

次いで万曆三十二年（一五九四）には、『新刊京本通俗演義全像百家公案全伝』（以下『百家公案』と略称）が上梓される。本書には、上記の「成化説唱詞話」所収の包公説話はもとより、新たに創作された説話や、既成の説話に包拯を附会したものなどを含めて、一〇〇回九七則の包公説話が収められており、短篇の包公説話集と云うことができる。

更に天啓・崇禎年間（一六二一～一六四四）に至っては、『龍凶公案』が雕版に附される。『龍凶公案』には、『百家公案』や、万曆期に踵を接するがごとく上梓された『詳刑公案』、『律条公案』、『廉明公案』などの公案小説集を素材に

用いて、一〇〇則の包公説話が収載される。¹²⁾この『龍図公案』は、清代に入ってからでも、一〇〇則を収める繁本のほかに、六二則の簡本が行われたり、或いは評語を附すものや無評語のものなど、版を異にして出版され続ける。しかし清代には、『百家公案』や『龍図公案』のごとき、包拯の裁判だけを撰録した短篇小説集の編輯は行われぬ。

このように、明代における公案小説の系譜をたどってゆくと、包公説話をもっぱら先行作品の襲用に終始しており、これが、『龍図公案』に至って、パターン化された、陳腐な短篇小説となりきった、¹³⁾との評価を受けるゆえんとなるのである。

いま一つは、包拯が物語中の一登場人物として描かれるものである。

『三遂平妖伝』(二〇回本)では、第一一回から二三回にかけての弾子和尚の話に包拯が登場する。この話は、『百家公案』第四一回「妖僧惑撰善王錢」にも収められている。

『水滸伝』引首では、包拯は仁宗を輔佐すべく紫微宮から派遣された文曲星の転生であるとされ、嘉裕三年の疫病流行に際して、俸禄をなげ出して薬を調合し、万民を救済しようとしたことが描かれている。

この二つの小説は、ともに物語の舞台を北宋の仁宗朝に措定しているため、包拯も同時代の人物として物語中に登場し、『三遂平妖伝』のごとく、包拯による断案が物語中の一事件を裁くという形で組み込まれているのである。したがって、公案小説というジャンルのもとの、包拯の関わった事件が、それぞれ独立した短篇小説として取り扱われているものとは明らかに別趣である。

また『三宝太監西洋記通俗演義』(以下『西洋記通俗演義』と略称)は万曆二五年(一五九七)刊行で、その第九四回「碧水魚救劉谷賢 鳳凰蛋放撒兇国」、第九五回「五鼠精光前迎接 五个字度化五精」に包拯が登場する。これらは、それぞれ『百家公案』第四四回「金鯉魚迷人之異」、第五八回「決戮五鼠鬧東京」を原拠にしている。物語は、明の永楽年間に太監鄭和と王景宏が外夷三九国を服従させたことを描いている。この小説の構成は、伝来の逸話が基盤となつて

おり、また内容は神魔小説に属するため、鯉魚や老鼠の精怪の事を叙述した包公説話が収載されたと考えられる。

清代には、既述のとおり包公説話のみを輯録した短篇小説集は行われぬ。強いて挙げるならば、嘉慶二四年（一八一九）刊『清風閣』に、『警世通言』卷一三「現身包龍圖斷冤」が再録されていることを指摘できよう。

このほか、嘉慶一三年（一八〇八）には、『後統大宋楊家將文武曲星包公狄青初伝』（以下『万花楼楊包狄演義』と略称）が上梓される。この小説は、狄青の出世譚にからめて北宋の官界を虚実を織り交せて描く章回体の講史小説であり、物語の舞台が仁宗朝であるため包拯も登場する。また書名に「文武曲星包公狄青」とあるように、包拯と狄青はそれぞれ文曲星、武曲星の転生であるとされ、第三回には、玉帝は武曲星に命じて包家に降生させようとしたが、文曲星も下凡を求めて先に包家に降生したので、武曲星は狄家に降生させた、という一節が収められている。これはさきに述べたとおり、「成化説唱詞話」に見ることのできた、文武曲星の転生説を継承したものである。伝来の包公説話は、第三回に仁宗の出世譚が、第四七、四八回、及び第五二回から六二回までに仁宗が実母李妃に再会するくだりが収められている。

三

包拯に纏わる説話は如上の経過をたどって伝承され続け、清朝も道光年間に至り、俠義公案小説という新しいジャンルのもと、従来にない新しい様相を呈するのである。

まず、『三俠五義』の構成について考察してみたい。この小説は、ストーリーの展開から次に示す四つの段落に分つことができる。

(1) 包拯の出世譚 第一回～二七回

- (2) 五鼠の開封府への帰投 第二八回～六八回
- (3) 馬朝賢一族断罪 第六九回～八四回前半
- (4) 襄陽王討伐の前哨戦 第八四回後半～一二〇回

このうち、伝来の包公説話が襲用されているのは(1)と(2)であり、(1)では直接の、(2)では間接の素材となっている。まず(1)の部分について考えて行くことにしたい。この部分で援用される包公説話の個々の内容は次のごとくである。

- (a) 仁宗認母故事 第一回、第一五回～一九回
- (b) 包拯出身伝 第二回～四回
- (c) 盆兒鬼故事 第五回
- (d) 双勘釘故事 第七回～九回
- (e) 陳州糶米故事 第九回～一四回
- (f) 還魂記故事 第二三回～第二七回^{a)}

以上の部分において特徴的な事柄は、伝来の包公説話を単に羅列したのではなく、これらの説話を援用しつつ、同時に包拯の発跡変泰の物語を創出しているということにある。彼はまず定遠県知県に任ぜられ(第四回)、被告を誤って刑死させたがために罷官せられるも、丞相王莒の推挙によって開封府尹に登用され(第六回)、陳州の飢民賑濟に際しては龍圖閣大学士の職を兼任し(第九回)、王莒の退官にともない丞相の位へと陞進する(第一九回)。

伝来の包公説話における包拯の発跡変泰の物語は、「成化説唱詞話」所収の『新刊全相説唱包待制出身伝』が最も古いものであるが、ここでは包拯が定遠県知県に任ぜられ転運使を断罪するところまでしか叙べられていない。この話

を承けて『新刊全相説唱包龍凶陳州糶米記』では、定遠県知県として双勘釘公事を断じた後、亳州知府の職を経て、王丞相の推挙で陳州へと派遣されるように構成され、更に『新刊全相説唱足本仁宗認母伝』は陳州の事件以降の出来事として描かれて、この三種の物語は合刊されていた。ところが『百家公案』に至ってこれらが数回に分断され、或いは前後転倒して配列されシリーズ性を失ったうえ、説話数の増加にもなって単行の説話も多く収められるようになった。『龍凶公案』になると、説話の内容によって二則ごとを対偶形式にならべるというように、編纂の形態が改変されたために、元来、個々の説話間にあった連続性が完全に失われ、短篇の読み切りの形で行われるようになり、包拯の発跡変泰の物語自体が失われてしまった。

このように、『三俠五義』において第二回から四回までに既存の包拯出身伝を援用し、更にこれ以降でも説話間に連続性を持たせながら、包拯を個別の断案に関与させ、同時に包拯の官僚としての地位を序々に昇せて行き、包拯の出世譚を形作るといふ、従来にない新しい構成をとっていることは特筆に値する。物語の前半で、包拯に仁宗朝における絶対的な権力を掌握させるということは、彼をこの小説の絶対不変の中心軸に位置づけ、以後、包拯を盟主と仰いで生動的に活躍する義士たちの姿を、より多彩に描き出す場を提供すること、つまり俠義公案小説としての方向づけを意図したうえで行われたものであり、伝来の包公説話は、決して無批判に援用されているのではない。第二七回までにおいて、義士展昭や白玉堂、また貪官龐吉が登場するのも、この小説が俠義公案小説として進展すべく布石が投ぜられているのである。因みに、包公説話のシリーズ化は、『三俠五義』が章回小説の体裁をとることによって可能であったのではなく、それ以前に石玉昆によって口演されていた時期にあっても同様であったこと、『龍凶耳録』から窺い知ることができる。

これに続く(2)の部分では、「五鼠」と呼ばれる五人の義士が開封府に帰投するまでが描かれている。

原拠となった包公説話は、五匹の老鼠の精怪が、秀才施俊、王丞相、仁宗、国母、包拯の五人に姿を変じ、真偽の

弁別ができずに事件は混迷をきわめるも、包拯自ら幽冥界に赴き、玉帝から雷音寺世尊殿の玉面猫を借り受けて妖鼠を退治する、という話¹⁵であり、胡適はこの説話に『西遊記』の六耳獼猴故事の影響を指摘する。¹⁶

『三俠五義』では、盧方、韓彰、徐慶、蔣平、白玉堂が、それぞれ鑽天鼠、徹地鼠、穿山鼠、翻江鼠、錦毛鼠という綽号を持つことから「五鼠」と称しており、一方、南俠展昭は仁宗から「御猫」という名を賜る。(2)では伝来の包公説話を粗型にして、「御猫」展昭と「錦毛鼠」白玉堂の争いを中心に、「五鼠」が開封府の包拯のもとに帰投し、それぞれ校尉の職に封官される、という話に改変されている。

次いで(3)の部分では、襄陽王趙爵と結託して造反を企図する権勢家馬剛、馬強兄弟、及びその叔父の総管馬朝賢を断罪するまでを描く。この部分では、包拯は登場するものの、物語はもっぱら義士たちの活躍を中心にして進展して行く。

更に(4)になると、顔查散を巡按使に任じて江沢湖の治水に派遣することに端を発し、金面神藍驍捕縛、飛又太保鍾雄説得で幕を閉じる。ここでは、文淵閣大学士で襄陽巡按使である顔查散が中心人物となり、義士たちは彼のもとで、襄陽王討伐の前哨戦とでも言うべき戦いに従事する。

このように、『三俠五義』の第169回以降では、伝来の包公説話から離れて、ストーリーが発展して行く。これは、前述のとおり、第二七回までにおいて、包拯を丞相の地位に陞進させ、義士たちの活躍の場を与えるという構成をとることによる。

四

以上のごとく、『三俠五義』において、第一回から二七回までは伝来の包公説話が直接的に用いられ、第二八回から

六八回まででは間接的に用いられている。胡適はこのことについて、

三俠五義には伝来の説話を受け継いだ部分と、新たに創作された部分とがある。おおむね包公を描写した部分は継承された説話が多くを占め、俠客義士たちを描写した部分はほとんど全てが新たに創作されたものである。

と言い、また、

三俠五義はもともと新作の龍図公案なのである。しかし、作者は半分近くまで作り上げて後、手をひいて、ほんのわずかも新しい龍図公案を作ろうとはしなかった。よって、この書の後半の大部分は完全に創作されたもので、包公の故事からは離れ去った。俠客義士の描写に専心したのである。

とも言って、⁽¹⁷⁾伝来の包公説話に依らない部分は、全く作者の創出になるものであるとの見解を示している。

なるほど、伝来の包公説話の襲用という観点よりすれば、それに依拠する部分と、そうでない部分とに二分することができよう。しかしながら、この小説での先行小説の援用は、前半部分における包公説話のみにとどまらず、全体の構成が『水滸伝』の形式に類似していることを指摘できる。

まず『水滸伝』の構成を大まかに考察してみたい。『水滸伝』では、引首冒頭の詞に続けて次の詩を掲げる。

紛紛五代乱離間 紛紛たる五代 乱離の間

一旦雲開復見天 一旦雲開いて復び天を見る

草木百年新雨露 草木百年 新たなる雨露

車書万里旧江山 車書万里 旧りにし江山

尋常巷陌成羅綺 尋常の巷陌も羅綺を成し

幾処楼台奏管絃 幾処の楼台にか管絃を奏す

人樂太平無事日 人は樂しむ太平無事の日

鶯花無限日高眠 鶯花限り無く日高きまで眠る

引首にも説明されるように、この詩は北宋の邵雍（大中祥符四年・一〇一一～熙寧一〇年・一〇七七）の「觀盛化吟」詩（『伊川擊壤集』卷一五）である。¹⁸ さて引首では、仁宗朝に洪太尉が一百八魔王を逃がす事件を描いて導入部とし、以下、徽宗朝において百八人の豪傑が落草して、次々と梁山泊の宋江のもとへと湊集する、彼らは官軍の討征にも屈せず、ついに招安されて帰順する、かくて彼らは官軍に編入され、大遼征伐、方臘討伐に派遣されて、これを平定する、百八人の豪傑もこの時すでに二十七人に減り、彼らもまた奸臣の毒計で死に追い遣られる、という物語が繰り広げられる。さて、『三俠五義』の冒頭にも、邵雍の「觀盛化吟」詩が掲げられている。この小説では、仁宗の出生奇譚にはじまり、包拯の出身伝にからめた彼の出世譚を作り上げ、次いで同じく伝来の包公説話に依拠しながら、これを換骨奪胎して、「五鼠」が開封府に帰投して封官されるまでを描き、第三段では、権勢家馬剛、馬強兄弟、そしてその叔父で貪官馬朝賢の断罪に義士たちが奔走する姿を描き、最後に、顔查散のもとで、仁宗に叛旗をひるがえす襄陽王趙爵の討伐に先立つ争いに従う義士たちを叙述している。

このように、『水滸伝』と『三俠五義』が、冒頭に同一の詩を配し、いわゆる緑林の英雄が盟主のもとに湊集し、奸賊討伐に駆馳する、という類似する構成をとることからすれば、『三俠五義』が『水滸伝』のストーリー展開の形式を襲用したであろうことに疑う余地はない。しかしながら、『三俠五義』と『水滸伝』が全く同じというわけではない。¹⁹ 『水滸伝』で王倫、晁蓋の跡を継いで梁山泊の首領となる宋江は、鄆城県の押司出身である。そして宋江をはじめとする百八人の豪傑が落草して盗賊の仲間入りをするのは、「官吏の非道な圧迫に対する反抗心からである」。彼らは官軍の討伐を受けても、これを撃破し、のちにあらゆる罪を許されて招安を受け、官府に帰順してはじめて正規軍に組み込まれるのである。一方、『三俠五義』における義士たちの盟主は、包拯という官僚である。しかも義士たちが権勢家

や貪官汚吏に對峙するのは、「不但与民除害、而且也算与国除害。」（民衆の害を除くだけでなく、国の禍害をも除くこととなる）という理由からであつて、彼らはきわめて盜賊的ではあるけれども、はじめから官の立場に立っており、『水滸伝』のごとく、民と官とを完全な對立の状態におき、盜賊の集團が叛亂軍的な様相を帯びてくるものとは明らかに異なる。『三俠五義』の第五八回までの、展昭と白玉堂の争いも、単に「只是有個御猫、便覺五鼠減色。」（御猫がいる限り、五鼠の精彩を欠く）ということにすぎない。

このほかに『三俠五義』には、登場人物の設定に先行小説の影響を受けたと考えられる箇所がある。すなわち第四回から四六回にかけて登場する龐吉がそれであり、これは『万花楼楊包狄演義』における龐洪の設定に借りたものと思われる。『三俠五義』では、龐吉は国丈として權勢をほしきままにする人物として描かれ、包拯を及第させた座主でありながらも、包拯の清廉な為人を嫌い、妖術をもつて包拯を亡き者にしようと企んだり、讒言誣告で弾劾しようとし、ついにはその悪行を咎められて民籍に落される。『万花楼楊包狄演義』においては、国丈龐洪は狄青を忌み嫌って常に弾劾を図る人物として描かれている。この小説には狸猫換太子故事、つまり仁宗の出生奇譚、及び仁宗と実母の再会を描いた物語が収められており、この物語が『三俠五義』に取り込まれるに及んで、敵對する龐洪と狄青の構圖も同時に吸収され、龐吉と包拯の關係が生れたと考えられる。『三俠五義』には龐吉の息子龐昱までもが登場し、陳州糶米故事での權勢家に充てられ、包拯から腰斬の刑に処される。このような、貪官を弾劾するプロットは、還魂記故事での葛登雲断罪や、(3)の部分での馬氏一族断罪などにも見ることができ、元明の包公説話において主要なテーマであつた、貴顕紳士や官吏に対する批判がそのまま揺曳されたものである。

『三俠五義』は、以上のごとく伝来の包公説話を母体にしつつ、『水滸伝』の構成や、『万花楼楊包狄演義』における登場人物の設定に影響を受けて成立した。では、清官包拯と義士との融合という、従来の包公説話には見ることできなかった形態は、何に由来するのであろうか。この問題について触れておくことにしたい。

『三俠五義』が石玉崑によって口演されていた時代に先立って、この小説と同じジャンルに属する俠義公案小説が行われていた。嘉慶三年（一七九八）に上梓された『施案奇聞』がそれである。『施案奇聞』では、中心人物として康熙年間の人である施世綸（小説では施仕倫に作る）を設定し、彼が遭運総督になるまでの事跡が描かれている。彼が包拯にも比肩すべき人物であることについて、本書の序文には次のように記されている。

本朝江都令施公、其為人也、峭直剛毅、不苟合、不苟取、一切故人親党有干謁者、俱正色謝絶之。江都為之語曰、「関節不到、有閻羅施老。」蓋以其行比宋朝包公也。

ところが、如上の部分は、『宋史』卷三二六「包拯」に基づく『龍凶公案』の陶煊元序に刪改の筆を施したものである。『龍凶公案』の序文に曰く。

及閱『宋史』所載、謂「其峭直剛毅、与人不苟合、無一毫妄取、平生無私書、故人親党干謁、一切謝絶之。……宜當時京師為之語曰、「関節不到、有閻羅包老。」以其笑比黃河清焉。」

このように、『龍凶公案』と『施案奇聞』の間には、序文においてすでに襲用関係を見出すことができ、また裁判官には包拯や施世綸といった清官を擬定していることから、『施案奇聞』が『龍凶公案』を意識していることは、充分に窺測されよう。

既述のとおり、『龍図公案』は天啓・崇禎年間にはじめて雕版に附されて以降、さまざまの形で出版され続け、およそ二〇数種にも及ぶ異版の存在が確認できるほどに盛行した公案小説集である。『施案奇聞』の出版は、こうした『龍図公案』の盛行を承けて行われ、まず、裁判官を北宋の包拯から施世綸という当代の人物に置き換え、更に『龍図公案』とは一線を画した新機軸を出すべく、黄天霸なる緑林の英雄を登場させて、俠義公案小説という新たなジャンルを創り出したと考えられる。このように、明代では短篇の公案小説集であったものが、『施案奇聞』に至って章回小説の体裁に取って替り、更に清官と義士の融合という新たな展開を呈したという点において、『施案奇聞』が発後の小説に与えた影響は大きい。

因みに、『施案奇聞』は小説として行われたほかに、講唱文芸としても行われていたようで、陳康祺の『燕下鄉陞録』には次のように言う。

少き時、即ち郷里の父老の施世綸は清官なりと言うを聞く。入部の後、則ち院曲旨詞に其の政績を演唱する者有るを聞く。蓋し小説中の刻に『施公案』一書有りて、公を比して宋の包孝肅・明の海忠介と為すに由り、故に俗口流伝、今に至るまで浪まばざるなり。

事実、道光四年（一八二四）の『慶昇平班戯目』には、一五出の施公案の戯目が著録されている。²⁰

同じく『慶昇平班戯目』には、『彭公案』の内容に関わる六出の戯目が著録されており、この小説の上梓は光緒一〇年（一八九三）であるけれども、道光年間にはすでに巷間に行われていたと考えられる。『彭公案』は、彭鵬（小説では彭朋に作る）なる康熙年間の人物を中心に据えた俠義公案小説である。

とまれ、石玉崑によって『三俠五義』が口演されていた同時代、もしくはそれ以前に、施世綸や彭鵬といった清官を中心人物とした俠義公案の世界が展開されていたということは、すなわち伝来の包公説話を基盤に物語を展開させた『三俠五義』において、義士を登場させるべき趨勢が形作られていたことを示唆しているであろう。つまり『三俠

『五義』は、『施案奇聞』『彭公案』という俠義公案小説の出現と相俟って形成されたと考えられる。

更に『小五義』や『続小五義』といった『三俠五義』の続書では、包拯は登場するものの公案小説の側面は捨棄されて、純粋な俠義小説へと変貌する。

六

以上に述べてきたように、『三俠五義』は、「公案」というテーマだけに重点を置かず、「俠義公案」という新しいジャンルでの創作を旨としたため、その前半部分には伝来の包公説話を取り込みながら、それらを単に連続するという形式にとらずに、包拯を中心人物に据えるという操作が行われていた。これを前提に、この小説の後半部分ではもっぱら俠客義士の活躍が描かれ、俠義公案小説として展開する。

最後に、明代に興隆した包公説話が『三俠五義』に至って、かくも大がかりで荒唐無稽な俠義公案小説に生れ変わり、かつそれを公案小説の集成とは面目を一新させたのは、何に起因するのか、それぞれ行われた場、つまり受容のされ方の相違という観点から考察してみたい。

明代の包公説話、特に『百家公案』や『龍凶公案』は、説話人の口吻を真似て叙述されてはいるけれども、はじめから読物としての上梓を意図して書かれ、編纂されたものである。

一方、『三俠五義』は、読物として上梓されるが、本来は聴衆を前に演じられた説書である。この説書という民間芸能は、清代においては頗る盛行したもので、陳汝衡氏は、「市民社会の繁栄にともない、各種の芝居や娯楽が興隆をきわめたが、このうち説書も南北各地で発達し、とりわけ乾隆中葉以後、小説や弾詞、鼓詞のたぐいが坊間で大量に刊行されたという現象は、説書業の発展が、聴衆の歓迎とひきはなして考えることはできないものであることを示

している。」という主旨の説明を行っている。²¹あくまで一つの可能性ではあるが、『三俠五義』が、はじめは説書という講唱文芸の様式で行われていたということは、短篇小説の集成によって構成されていた明末の包公説話の編纂形態が、長篇の俠義公案小説に替られた要因に数えられるのではなからうか。説書が聴衆を前に演じられ、しかも聴衆の嗜好を等閑視できないものである以上、石玉崑は伝来の包公説話に修改を施し、更に、「俠義公案」という形式を用いた『施案奇聞』の方法を踏襲することによって、旧弊を打破する必要があったのではないか。これが、石玉崑が旧来の包公説話をより独創的で斬新な意匠でもって再生させるゆえんとなるのである。さればこそ、『子弟書』に収められる「石玉崑」に、

高抬声価本超群 高く声価を上げるに本群を超え

庄倒江湖無業民 江湖を庄倒する無業の民

驚動公卿誇絶調 公卿を驚動して絶調を誇えられ

流伝市井效眉顰 市井に流伝して眉顰を效ねらる

編来宋代包公案 宋代の包公案を編み来して

成就當時石玉崑 成就せるは当時の石玉崑²²

と、石玉崑の説書が讃えられるのである。かくて、伝来の包公説話は、清官包拯のもとで正義漢たちが活躍する物語へと姿を変えたのである。

註

(1) 「從石玉崑的龍圖公案說到三俠五義」(『文学季刊』第一卷第二期、一九三四)。

(2) 「関于石玉崑」(『小説二談』、古典文学出版社、一九五八)。

- (3) 大塚秀高氏が呉曉鈴氏所蔵の抄本『忠烈俠義伝』を調査し、『道光二十八年三月石玉崑序』と署名『俠義伝序』を冠する。この序は刊本の光緒五年の序と完全に一致する。とすれば事実は問竹主人が石玉崑の序を『光緒己卯孟夏問竹主人』と書き改めて流用した、即ち『忠烈俠義伝』は道光の頃には現在の姿になっていたか(呉曉鈴)、書肆が抄本の序を偽造したか(胡士瑩)のいずれかであろう。」と報告されるように(『北京觀書記』その二——双楮書屋読神小記——、『汲古』第八号、一九八五、所収)、『三俠五義』とその底本との関係については、検討を要する。
- (4) 「七俠五義序」。
- (5) 『中国小説史略』第二十七篇、「清之俠義小説及公案」。
- (6) 前掲註(5)。
- (7) 耐得翁の『都城紀勝』(凡舎衆伎の条)には「説公案、皆是搏刀趕棒、及発跡変泰之事。」とあり、呉自牧の『夢梁録』(卷二十、小説講經史の条)には、「公案、朴刀桿棒、発発踪參之事。」とある。
- (8) 「元の裁判劇における包拯の特異性」(『中国戯曲演劇研究』、創文社、一九七三、所収)。
- (9) 拙稿「明代における包公説話の展開——『成化説唱詞話』を中心として——」(『中国文学論集』第十五号、一九八六)において詳述したので参照されたい。
- (10) 前掲註(8) 岩城氏論文。
- (11) 前掲註(9) 拙稿。
- (12) 『龍岡公案』成立に至るまでの説話の授受関係については、馬幼垣氏「The Textual Tradition of Ming Kung-an Fiction: A study of the Lung-tu Kung-an」(Harvard Journal of Asiatic Studies, Vol. 35, 1975) / 大塚秀高氏「公案話本から公案小説集へ——『内部分説之末流』の話本研究に占める位置——」(『集刊東洋学』第四十七号、一九八二)、また拙稿「龍岡公案』編纂の意図」(『中国文学論集』第十四号、一九八五)を参照されたい。
- (13) 大塚秀高氏「包公説話と周新説話——公案小説生成史の一側面——」(『東方学』第六十六輯、一九八三)。
- (14) それぞれに先行する包公説話を列挙すると次のとおりである。尚、(a)(c)(d)(f)については、孫楷第氏「包公案与包公案故事」(『滄州後集』、中華書局、一九八五、所収)に論考がある。但し、「成化説唱詞話」と『百家公案』には触れていない。
- (a) 『金水橋陳琳抱粧盆』雜劇
『金丸記』戯文(明・姚茂良撰)

- 『仁宗認母』(佚、汪元亨撰。『錄鬼簿統編』に著録)
『新刊全相說唱足本仁宗認母伝』(成化說唱詞話)
『百家公案』第七四回「斬斬王御史之贓」・第七五回「仁宗皇帝認親母」
『龍図公案』卷七「桑林鎮」
『万花樓楊包狄演義』第三・四七・四八・五二・六二回
(b) 『新刊全相說唱包待制出身伝』(成化說唱詞話)
『百家公案』「包待制出身源流」
(c) 『玎珰瑞盆兒鬼』雜劇
『新編說唱包龍図公案断歪烏盆伝』(成化說唱詞話)
『百家公案』第八一回「瓦盆子叫屈之異」
『龍図公案』卷五「烏盆子」
(d) 『包待制双勘釘』雜劇(佚、『太和正音譜』に著録)
『百家公案』第七六回「阿吳夫死不分明」・第七七回「判阿楊謀殺前夫」
『龍図公案』卷二「白塔巷」
(e) 『包待制陳州糶米』雜劇
『新刊全相說唱包龍図陳州糶米記』(成化說唱詞話)
(f) 『新刊說唱包龍図断曹国舅公案伝』(成化說唱詞話)
『百家公案』第四九回「當場判放曹国舅」
『龍図公案』卷七「獅兒巷」
『包龍図公案袁文正還魂記』(伝奇)
『雪香園』(『曲海総目提要』卷三二に著録)
『瓊林宴』(同、卷三五に著録)
『双蝴蝶』(同、卷四六に著録)

(15) 『三俠五義』に先行するものとしては、次の説話を挙げることができる。

『百家公案』第五八回「決戮五鼠鬧東京」

『龍凶公案』卷六「玉猫」

『西洋記通俗演義』第九五回「五鼠精光前迎接 五個字度化五精」

『五鼠鬧東京包公收妖全伝』

(16) 『三俠五義序』(『胡適文存』第三集、所収)。

(17) 前掲註(16)。

(18) 『水滸伝』に引用される詩と、もとの詩の間には異同があり、『伊川擊壤集』に収められる詩は次のとおりである。「紛紛五代乱離間、一日雲開復見天。草木百年新雨露、車書万里旧山川。尋常巷陌猶簪紱、取次園亭亦管絃。人老太平春未老、鶯花無害日高眠。」

(19) 小川環樹氏「『水滸伝』の作者について」(『中国小説史の研究』、岩波書店、一九六八、所収)。

(20) 周明泰氏『道成以来梨園繫年小録』(一九三三)の道光四年の条に「退菴居士(文瑞図)蔵旧戯目一冊、係道光四年慶昇平班領班人沈翠香所有之物。……」として戯目二七二出を列挙する。ここには、『三俠五義』の戯目も九出収められている。以上については、劉世徳・鄭紹基氏「清代公案小説的思想傾向——以《施公案》、《彭公案》和《三俠五義》為例兼論“俠義”的実質」(『文学評論』一九六四年第二期、一九六五、所収)に指摘がある。

(21) 『説書史話』第六章「清代説書」(作家出版社、一九五八)。

(22) いま関徳棟・周中明編『子弟書叢鈔』(上海古籍出版社、一九八四)に収める別楚堂鈔本によった。前掲註(1)(2)所引のものとは字句の異同がある。